
消音は語る

porigon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消音は語る

【Nコード】

N3589R

【作者名】

p o r i g o n

【あらすじ】

エンターテイナー
空想執筆の能力によって『とある』の世界と『なのは』の世界が入り混じる。

そこで一体主人公はどう生きるのか、すべては作者のみぞ知る。

**A
M
E
N**

「我らは代行者」
エキユスキシヨナー

「[Amen]」

「醜惡な俗物を屠る神の使徒」

「[Amen]」

「祈り、捧げよ。
聖なる賛美歌を」

「[Amen]」

「紡ぐ呪詛は唯一無二」
オーメン

「[Amen]」

「「我らに正義の牙を!!」」

——この時から既に世界は変わり始めていたのかもしれない。

世界はこうして交わり始めた。

それはありえるはずの一つの物語。

神の介入によって果たされた新たな世界の起源。^{ハジマリ}

消音は語る

——ピピピピピ…

無機質な音が広がる。

この部屋の主たる俺は関係ないように体を丸めて布団を抱きしめる。

だが、それは叶わなかった

「いい加減にしてもらえる？」

「あア？ うるせえよ。

せっかくの休みに邪魔してんじゃねーよ」

「今日は月曜よ」

「俺は週休七日だ」

「ただの不登校じゃないの」

「それでかまわん」

「だめに決まってるでしょう！！」

あー、ふとんがー。

まー、いいや。

ベットがあれば俺は寝むれる。

「…呆れた」

「それでけっこう」

「……置いていくわよ？」

「気をつけてー」

「…ふう」

ドアの開閉音が聞こえる。
行ったな。

「毎朝ご苦勞なことだ」

掛け布団を無くした裸の寢所から跳ね起きる。

「さーて今回の依頼は、っと」

パジャマのまま、先ほどまで自らが横になっていたマットレスを
上げる。

そこには様々な銃器が立ち並んでいた。

『おはよう、ミスター』

「Hi、ミズ。

ご機嫌はいかがかな？」

『あなたの言動次第ね』

「それは気をつけよう」

『今回の任務は——』

物覚えついたときには遅かった。

そのとき、既に俺は人を殺していたのだ。

単純なこと——

引き金は指に吸い込まれるように血を吸い続けた。

男、女、老人、子供、囚人、聖人、大統領、貧民。

数えることのできない数を土に還した。

付いた名前は『サイレント』。

今では裏での恐怖の代名詞として流行語に近いものとなっている。

「で、エルザ君？」

『なにかしら』

「次の獲物は？」

——管理局

OK、最高の言葉だ。

プロローグ

「知識とは甘美なる物ではないかね、小僧共」

先のやり取りから半日ほど。

ここに我はあり。

場所は、そうだね。

ゴミ溜めといったところか。

「な、にが……もく、てき……だ」

「下層の民衆運動をたたくするには、
理屈ではだめで、砲兵を用いてつぶすに限る」

「…は？」

「貴様ら管理局を潰すには事件を起こすよりも、
乗り込んだほうが
速いということさね」

「それだけの理由で——」

「はい、冥土の土産終わり」

手元のサプレッサー付きのコルトバイソンが跳ねる。

眼下の男には風穴を空けてやった。

よかったな、カチカチの脳みそに空気がよく入るようになって。

「さーて次の獲物は、っと」

俺は歩くさ、俺に終わりが来ない限り。

「緊急招集ごめんな」

「いいよ、気にしないで」

「そうそう、自主練でみんな頑張ってるみたいだしね」

私は急な はやてちゃんの呼び出しを不思議に思いつつも、気にしてないことを伝える。

はやてちゃんは、ホッと息をついて語り始めた。

心なしか隣のフェイトちゃんも緊張しているみたいだ。

「――今朝、本局が襲撃されたんや」

…え？

「待って！ 冗談でしょ…？」

思わず口から否定の言葉が出ていた。

フェイトちゃんも怪訝な目でデスクの向こうの はやてちゃんを見つめている。

「うそやないんや、被害は死者21人に怪我人がおらん。つまり、直に会ったもんはみんな殺されとる」

「殺された…」

フエイトちゃんの顔色が悪い。

私もきつといい顔とは言えない顔をしているだろう。

「防犯カメラに犯人が映った」

目の前のタッチモニターを操作して はやてちゃんは映像を見せてくれた。

『死は感覚の休息、衝動の糸の切断、心の満足、または非常召集中の休止、肉への奉仕にすぎない』

モニターの向こうの男は制服を着た同僚に向けて引き金を引いた。数えて六人目、男はひどく、とても笑みで歪んだ顔で命を散らしてゆく。

「もういいよ…！」

「さよか、ごめんなあんま見せなくなかったんやけどな。相手の特徴とかも確認せなあかんかってん」

「…私たちと同じくらいの男の子だったね」

そう、彼は非常に若かった。
同年代で間違いないだろう。

「モニターで…、といってもウチが見たわけやないんやけど。
問題は死体の数と殺された数が合わんことなんや」

「え？ それって…」

「中にはA Aクラスの人もおったんや。
怪しゅうないか？」

「——ネクロロマンス」

「フェイトちゃん？ なにそれ」
どこかで聞いたことがあるような。

「一時期、問題の起こった宗教があつたでしょ。
『神聖クロス教会』、彼らの教祖はレアスキルを持ってたの」

「もしかして…！」

「そや、レイズ・ネクロロマンス『完全蘇生』とよんどる。
彼らの切り札の死人を操ることのできるレアスキル」

「——じゃあ！」

「でもちやうんよ、その人じゃないんや」

「へ？」

「もう死んでるんだよ、なのは」

「死ん…でる？」

「やあ、ミズ！ ピーチパイはいかがかな？」

「あら、それはありがたいわね」

「残念！ 全部あっちにおいてきちゃったよ！」

「ホント…、殺人の後はテンション高いわねアナタ」

「倦怠は機械的な生活のもろもろの行為の果てにある。
しかし同時に、これは意識の運動に指導を与えるものである」

「また名言かしら？」

「ああ、そうだよ！ 素晴らしい！

この殺しの後の鮫が小魚を喰らったような快感！
俺の——」

「はいはい、とりあえず目的のものを出して頂戴」

「むう、語りを邪魔するとは無礼な…」

——ほら、これだろう」

「——確かに…」

これで全てがそろったわ」

「やれやれ、これでお役御免かね」

「ええ、これでアナタに対しての依頼は終わりよ」

「それでは次の依頼に取り掛かせてもらおうでしょう」

「——え？」

昨夜、ミットチルダの駅に吊るされた女の死体があるのを通勤途中の男性が——

死とは、永遠の眠り以外の何者なりや？

生とは、眠りつつ、かつ喰らうことに存するにあらずや

ああ、すべて片付けた。

ロストロギアとかいうのも回収した。

なに？ 俺の報酬がこれだと！？

…、まあいい。

これらの名は？

封神剣クリカラ、ポイアスの射手、ロンギヌス、ウコンバサラ、
ウロボロスの杖、ネクロノミコンにMの書…。

神話級の化け物ばかりか、何がしたかったのやら。

とにかく、俺の計画の柱になってもらうか。

——キヒッ

物語のハジマリの前

「こんちわー、絶望を届けに参りましたー」

「なにを、ぐお!？」

なんとも安い遺言ですな。

デリバリーみたいな口調だった俺が言うのもなんだが。

まあ、新しい得物の的ぐらいにはなってくれたので褒めてつかわそう。

…ンア？

「あんたが『サイレント』か？」

oh! まさか薄暗い路地裏でピチピチタイツのお嬢さんに出会うとは。

これは運命感じちゃうなあ（性的な意味で）

「だったらどうなのだよねんおぜうさま」

「なんだよ、その口調は」

ふむふむ、赤いつんつんヘアーに垢抜けない顔。
十四歳から十六の間ですな。

「おい、聞いてんのかよあんた」

「おお、失礼興味がない」

「…テメエ」

「おやおや、暴力かね？」

「やれやれ、これだから合成着色料と化学調味料に犯された若者は」

「——もういい」

「おや」

彼女の右コブシが地面を抉った。

なんというコブシ。

「なるだけ平和に連れてこいって言われたけどよ。」

あたしはそれほど気が長くねえんだ」

「みればわかりますですはい」

コブシが掠る。

問答無用ですね、わかります。

「あぶないな」

「だったら得物を抜きなよ、伊達に名ばかりなわけじゃないんだろ」

oh！ 勘違いされてる。

「危ないのは君さね」

「ああ！ テメエ状況がわかって——」

「――そっくりそのまま返させてもらおう。

貴様こそ状況が理解できているのか？」

お嬢さんの顔が強張る。

「俺、いや私の戦闘力は君のそれを遥かに凌駕している。

無駄口を叩く前に決死の思いで一撃を入れるのを目指すべきだと
私は思うがね」

強張りの顔から憤怒の顔へクラスチェンジした。

「上等だよ、ぶっ潰してやるよお!!」

「よろしい、では右手のみで相手をしよう」

「ほざけ！ おおおおおおおおおおおおおおお
おッ！」

やれやれ、叫べば力が上がるのかな？

「遅いね」

右フック、左アッパー、回し蹴り！

「なッ!？」

「単調すぎるよ、君」

はい、一ビンタ。

「いだ!？」

にー、さんー、しー。

「ちょ、いた、やめ！」

トドメの往復ビンタ。

「み、つぶ、ち、ほん、おま」

最後。

「つぶぱ!？」

「どうだい、実力差がわかったかね？」

「——ッ、ぶっころ」

「これ以上の戦闘行為には命を伴うことになるが、宜しいのならば来たまえ」

もう殺しは楽しんだのでダルイのだが。

「…次はぶっ殺す」

あ、怖気づいた。

「やってみたまえ」

プイっとな顔を背けて彼女はローラーブーツのようなもので去っていった。

「ふむ、なかなか可愛くない子供だったな」

別の方向へ振り向き、歩き出す。

そーいや名前聞いてなかったなあ。

学園都市・七月十六日午前

今日は火曜日だね！

学校はサボるけどね！

「まったく、さっさと学校に来な。

吹寄が怒ってたじゃん？」

「アイツ、生理だったんじゃないんですか？ 吹寄だけに。

それよりも黄泉川先生が俺の部屋にいるほうがcrazyだと思われませんが？」

赤髪ガールを退けたあとダラダラと家で過ごして爆睡したら、朝になって、かつ我が担任の黄泉川先生が枕元に立っているとは。

「生理のネタはやめろ、結構女の子は苦労してるじゃん」

「ういーす」

デリカシーがなかったな、すまそ。

「システムスキャン身体測定だからな、迎えに行けと直々に命令されたじゃん」

「うへ、校長もよくやるぜ」

俺が通っている高校は？フォース（サンバカ）やらフラグ建築士やらがゴチャゴチャいるので相手にしていると疲れるのだ。

「じゃ、学校でな」

フリフリと玄関に向かい、手を振って彼女は靴を履く。
ワンルームなのでよくわかる。

「いいんすか？」

「いいじゃん、言ったらオマエは来る奴と知ってるじゃん」

「はいはい、わかりましたよ」

じゃーな、と言って彼女は出て行った。

学校での準備もあるのだろう。

面倒だが行かなければならないことになった。

「…ふう、ダルイな」

準備をするでしょう。

えーと…。

七月十六日、六時四十三分…。

早朝じゃねえか!?

まー、いい。

——学校って何を持っていくんだっけ？

なかなか時間がかった。

教科書とかあったな、そういや。

制服着てー、カバンに教科書詰めてー、ガバメントもってー。

あつ、バイクのキー忘れるところだった。

あとは、……これも持ってくるか。

「よし、完璧だろう」

「今日は身体測定なんだから……、さっさと……」

なんだ、その頭の中に爆弾があると言われた博士のような顔は。

「……、ジーザス

今日は世界最後の日ね」

「おい！ 失礼だろう！？」

「でも、アンタが一人で起きるなんて！」

「黄泉川先生が来て起こしてくれたんだよ！ 身体測定だからってな！」

「…なんだ、そうだったの」

「テメエマジで失礼極まりねえぞ」

俺のコブシが唸るぜよ。

「まあ、いい。

行くぞ吹寄。

このままで行けばオマエが遅刻する」

玄関まで歩き、立ったままの吹寄を尻目に靴紐を結ぶ。

「え？ まだそんな時間じゃ…」

「は？ 俺の時計は八時を…」

——まさか！」

テレビをつけると、七時をお知らせしていた。
黄泉川め、やりおるわ！

「身体測定…か」

「どうした吹寄？

憂鬱そうではないか」

「うちの高校で今日が楽しみの奴は馬鹿しかないわね」

「ごもっともで」

結局さっさと登校することにした俺たちは、まだ通学生がほとんどいない道を歩む。

まったきゅ、信じられない時間に起床したんだな俺！

「半日で学校が終わるのが唯一のいいところね」

「へえ、そうなんだ」

半ドン（死語）なんてしらなかったお！

「そうか、だったら午後から暇だな」

依頼もないし、帰って寝るか。

「だ、だったら！」

「あん？」

「きよ、今日開店のクレール屋があるんだけど一緒に行かない！？」

「あー、オマエの友達もいるんだろ？

そんじゃ悪いから俺は遠慮するぜ」

「いないいない！ 私友達いないもの！」

「なんじゃ、その嘘のつきかたは…」

第一、吹寄見たいなタイプの人間にダチがないんなら、俺は孤独死で死ぬことになるぞ。

「と、とにかくきゅ行きましょう!？」

「きゅって…、いいけどよ」

どうせ帰っても寝るか魔道書の解説しかすることないんだから、いいけどよ。

「行ったわね! ぜったいよ!？」

「はいはい、わかったよ。」

終わったら迎えに行くから待ってるよ?」

「お、遅れないように来るのよ!？」

へーい、と返して自分の教室に向かう。
話してたらあっという間についたな。

「制理のお嬢、お迎えにあがりやした」

中腰で太ももに両腕を突いて、ヤのつく自由業の人の御挨拶を繰り出す！

「……………」

「……………」

スベッタ。

「よし、帰るぞ吹寄！」

「「なにごともなかったかのように！？」」「」

そのシンクロ率はなんだ。

「行くわよ」

青筋が浮かんでるけど気にしない。

「おお、ついに吹寄にも春か！」

「さすがカミヤん！ 空気呼んでない！」

「もはや特技の域やね、うん」

なんか後ろに？フォースが…。

吹寄も煙吹いてるし、ひっぱってこよう。

おー、混んでる混んでる！

「混んでるわね」

「俺にもそう見えるよ」

ぐるりと周りを見渡すと見学用の貸し切りバスを発見。
悪意しか感じないな、このブッキング。

「あー、私が行ってくるわ」

「あ？ 確かに一人が買って、残りがベンチを取っておくのはいい
アイデアだ」

「でしょう、だから――」

「だが断る」

「なっ！？」

こんな掛け合いを続けて、結局俺がクレープを買いに行くことになった。

「いらっしゃいませ！ 何にしますか？」

「あー、イチゴチョコとバナナシナモンを」

「かしこかしこまりましたかしこー！」

！？ 日本語がおかしかったような！？

それにしても子供が多いな、気が滅入るぜ。
こうまでしてクレープが食べたかったのか

「おまたせしました、ご注文の品と景品のゲコ太ストラップです」

「おお、これはどうも」

「おまた♪」

「不気味ね」

「ぐお、心にくる発言だな」

カプリと、俺から受け取ったクレープをかじる吹寄。
まったくー。

「なによ、ジロジロみて」

「ふ、クリーム」

「え？ 嘘、どこよ」

右頬についたクリームをすくい取り、口に運んで舐める。
甘いな、しかし。

「な、な、なああああああああ！」

む、真っ赤な顔で指差されても？
言葉にしないと伝わらないんだが。

「白井さん白井さん！ あの人たちレベルの高いカップルですね！」

「落ち着きなさい初春、人を指さすものではありませんわ」
茶化されてるし。

「む、あいつら見たことあるぞ？ どこだっけか…」

「お似合い…、レベルの高い…」

トリップしとるし。

——？ ん…

「おっまたせー！」

「またせたわね…」

「あら、お姉さま。

ゲコ太はもらえませんでしたの？」

「アタシの前で終わっちゃって…」

「……はあ」

「み、御坂さん！ ファイトです」

「…なににですか？」

「面白いコントね」

「いやまったく」

あの御坂とか言われてたやつ——。

「LEVEL 5（超能力者）には見えないな」

「……へ？」

「御坂美琴、学園都市第三位超電磁砲の二つ名の常盤台中学の二年。電撃使い（エレクトロマスター）で音速の三倍で打ち出すコインはスキルアウトやらを一撃でのすほどの威力を持ち、化け物の第一位と二位を省けば、実力は実質最高クラスの少女だ」

「く、詳しいわね」

なんで口元引きつってんだよ。

「この都市で出会っちゃいけないやつぐらいわかるさ」

「つくづくアンタが理解できないわ」

「そいつは重じょ——」

俺の言葉は爆発によってかき消された。

「ずらかるぞ！」

おーお、アホどもがワラワラわいてえ。

「お待ちなさい！
ジャッジメント 風紀委員ですの！」

あ？ アイツって今さっきそこにいたやつじゃね？
風紀委員だったのか。
ちいさいのに頑張るな、花丸をあげよう。

「吹寄、帰るか」

「：そうね、ここにいても危ないだけだし」

「すみません！ 男の子をみませんでしたか！？」

——厄介ごとですか？
それは上条の仕事でしょうに。

学園都市・七月十六日昼

「どうかしたんですか？」

「実は見学の男の子が一人足りなくて！」

「落ち着けよ、お姉さん。」

ガキの足なんだ、行ける範囲なんてたかが知れてる。
周りを探せばすぐに見つかるさ」

「そうね、手分けして探しましょう」

…あれ？　なんか俺も手伝う感じ？

「ガイドさんは公園の周りを、人に探すのを頼みながら探してください。」

「アンタは私とバスよ！」

いいけどさー、めんどくせーなー。
俺、ガキ嫌いだし。

「すみません！　お願いします！」

パタパタと彼女は公園の中へ戻っていった。

「行くわよ」

「…わかったよ」

男は車に乗り込んだ。
どーでもいいや。

桜の髪飾り的なのを挿してる子にかばわれてるガキンチョが行方不明の子でしょ、常考。

「聞いたことがある！」

なにが、そしていきなり話し出すな犯人A。

「風紀委員には捕まったが最後、心も体も踏みにじって再起不能にする最悪のテレポーターがいて…」

「誰のことですか？ それ」

おまえだろうさ、鉄針とかえげつねえ。

つか、見知らぬところで超電磁砲が発射準備に入ってるんですけど！？

「そのテレポーターを虜にする相方…、あの最強の電撃使い…」

『超電磁砲』！！」

「どんな噂になっているかは知りませんが、あの方こそが学園都市二三〇万人の頂点。

『超電磁砲』御坂美琴お姉様！」

炸裂音とともに車が縦回転でバスのほうへ…。
ん？ バスのほう…！？

おいおい、バスにはまだ――

「常盤台中学が誇る、最強無敵の電撃姫ですの！」

「きゃあああああああああああああ！！」

吹寄いるんだよ！

「ち、だらしねえな！！」

走る、駆ける、滑り込んでマイクロバスの入り口に屈んでいる吹寄を背に。

飛んでくる車（イン犯人C）を。

「ぐらあ！」

左手でぶん殴った。
ちょーいてえ。

「「「はあ！？」」「」」

正しい反応です、ありがとうございました。

「吹寄、怪我は？」

「だ、大丈夫」

「ならよし」

俺の腕はグチャグチャだけどね。
能力を使っても、状況でどうにもできないことってあるから。

「ご、ごめん！ 大丈夫！？」

「おいおい、テメエの力をどうしようが勝手だがよ。
人様に危ない目を見させてんじゃねえよ」

緊張感がないからわかんないが、あと一秒遅ければ吹寄死んだ。
冗談で済んでよかったが。

「本当にごめんなさい！ 大丈夫でしたか！？」

吹寄は放心している、あたりまえか。
あんなもん飛んできたらな。

「――あ、うん。

大丈夫だから心配しないで」

「よかったあ…」

「お姉さま！ だからあれほどおとなしくしておいてくださいと…
！」

「はいはい、わかったわよ。
今回は反省してますよー」

「ならば次からは…」

よし、丸く収まった感じだし。
抜き足、差し足、しのびあ——

「あの、ありがとうございました！」

mission failed…。

「あの、あの、すごいかったよかったです！」

「そいつはどうも…」

やめてほしいわ、この娘！。
早く消えたいのに！。

「どんな能力なんですか！？」

——Ah？

「能力で撃ちぬいたんですね！ 犯人の靴を！」

…世界が止まった。

「——撃ちぬいた？」

「おかしいですわね、遠距離に弾を撃ちだす能力ほどのものならば
LEVEL 3（高能力者）はあるはずですよ。

しかし、その制服を見るところ、確かそちらでは良くてLEVEL
L 2（異能力者）までの高校だったのでは…」

うげ、よく知ってんな。

まずい、このままだと――

「すいませんが、貴方の能力を…」

「あいたたたああああー」

「ど、どうしたの!？」

突然大きな声を上げた俺に対し、吹寄が心配そうな面持ちで話しかけてくる。

「骨が折れてんだ、病院行こう」

「え？」

右肩に吹寄を担ぎ、全力で走る。

ガバメントが見つかるのはごめんだ!

「ちょっと、お待ちに!？」

「あ、あわわわ!？」

「ま、まちなさいよ!」

慌てる中学生たち、残念。

モーリスグリーンは速いんだ!

「おろしなさい!」

「やだね!」

あいつらに俺の名前聞かれたら絶対おまえ教えるもん！

「とりあえず病院に付き合え」

「…しょうがないわね、私のせいだしね」

病院で全治二ヶ月と言われ、吹寄が健康グッツを死ぬほど持ってきたのは別のお話。

ミッドチルダ・七月十七日十時ごろ？

「で？」

「全治二ヶ月だって」

「馬鹿ね」

「サーセン」

自室のデスクの上でモニター越しの彼女が静かにキレている。
こちらは誤るしか手がなし。

「ミスター、いい加減にしてほしいわね。
仕事は山積みなのに」

「返す言葉もございません」

でもさー、あーしないと吹寄が危なかったんだからしょーがない
よねー。

「∴どうしようもないから、Cランクの仕事を発注します」

「よしこーい」

確かにあまりにも無様だったからな、ちよつとぐらいカッコいい
ところを…

「管理局一等空尉『高町なのは』の情報収集及び可能ならば抹殺」

……。

？ あれ？

俺の耳がおかしくなったのかな？

「なお、このミッションはキャンセル不可です」

「マジかよ…」

管理局の白い悪魔を殺すなんてSSランクじゃねえか。

はい、と言うことで。

なぜか死亡フラグだったので、暗殺どうでしょう。

「さーて、いかがでしょうかね…」

ビルの屋上で片手にバレットM95に持ち、狙撃の準備に入る。
目標は呼び出した、確実にやってくる内容で…。

『暗殺者について教えてやる、一人で来い。』

ミッドチルダのデパートの入り口、制服だ』

場所も日時もこちらが決めた、アドヴァンテージは大きい。
——だが。

「ひとりで来るわけねーよな…」

俺があっちの立場ならゼッター周りを味方で囲うもん。
それにわかりやすい制服なら狙撃されやすい。

「さーて、エ…、じゃない。

ミズ？ 探知よろしく」

「了解、探索を開始します」

右手のバレットM95を今いるビルの屋上の縁に銃身を置き、
体で残りの部分を支える。
左手が使えればな！。

「あー、いた？」

「——撃ち殺しなさい」

「はあ？ だから——」

「反応なしです、舐めているとしか思えません」

…マジかよ。

「狙撃で終わると思われませんが？」

「ああ、そう思いたいが…。
転送準備をしておいてくれ」

「了解、今回は暗殺の完全遂行というわけではないのでかまいません」

あくまで情報収集がメインね…、なに考えているのやら。
まあ――

「お仕事しましょうか」

静かに構えた。

「Hey、ガール？
元気かい、俺は今無性に苛立っているぜ」

「――あなたはッ！」

「おやまあ、もう顔が割れてんのか。
当然か、対策してねえもんな」

「なッ——」

「言葉は要らない」

金属が重なり合う音が響いた。

結果から言う、暗殺には失敗した。

だってー、一発の銃弾にエクセリオンバスター撃ったりするんだぜ？

プロテクションでカンッて弾いたのに、返した攻撃はズゴゴゴゴゴゴですよ。

オーバーキル甚だしいわ。

「何故管理局員ばかり狙うの！？」

「さあ？ お偉いさん方に聞いてくれ」

「：しようがありません、貴方を拘束してから聞き出します」

「やってみろよ」

ニヤリと口角をあげる。

嗚呼、俺って悪役。

「さあ、殺しあ——」

——ギイジジジジジ

そこに、聞こえた。
機械の制御音。

こいつぁ…、面倒な。

そう思ったところで、囲まれた。

ガジェットドローンとか言われる機械だな、こいつは。

「こんな時に――

まさかあなた…！」

「タンマ、テメエの相手してる場合じゃなくなった。

おい、エルザあこんな状況になるとは聴いてないぞ」

『上からの命令よ、

――あなたは『ここで切り捨てる』と』

ああ!？

「テメエどういう――」

『じゃあね、今度会うときは敵よ』

念話が切れた、野郎…。

「おい、高町！」

「…なんですか？」

わお、なにその顔。

隙なんかまったくありませんよ。
だから、レイジングハート下げてくれ。

「ここは共闘といかないか？」

俺は上に見限られてな、どうしようもないんでね」

ははは、と笑い飛ばす。

「…頷かなければ？」

「別に、切られたし。

アンタを殺す必要もなくなった、一人で切り抜けるだけさ」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「…わかりました」

考える、考える、悩みぬいた末。
勝った。

「ですが、戦闘終了後に出頭することが条件です。
それが飲めない場合は」

「わかったよ、大人しく捕まってやるさ——」

もちろん嘘だな。

「では、名前を」

「あン？　なんでそんな」

「私がアナタを呼ぶときに困るでしょう？」

そうか、小娘にまで殺し名を知られてたら終わりだもんな。
（世間的な意味で）

「ふむ、では特別に教えよう我が名は『サイレント』！
暗殺率10割を誇る、天才だ。

その名に刻んでおきたまえ」

「人を殺すことを楽しむなんて最低」

「それは価値観の違いさ！
俺は生きるのが楽しいから人を殺めるのだ！」

といいつつ、高町と背中合わせになりながら能力を行使する。

「『自身創造』（クリエイティブマイン）」

ギプスで固定されていた左腕が復元されていく。
さすが俺！

「！　なんでもありませんね、アナタ」

「なんとも言うがいい、君は仲間に連絡したのか？」

「大丈夫です、私の所属しているところはガジェット担当の課ですから」

さーて、囲まれてやつこさんがたもいきり立ってるし。

左腕も順調に復元完了。

冥土返し（ヘブンキャンセラー）をどうやって誤魔化そうかな。

あの人でも全治二ヶ月だからそーとーなダメージのはずなんだけどな。

よーし。

「行きますか、高町さん？」

「行きましょう、サイレントさん！」

その声で、真逆の方向へ俺たちは走りだした。

高町はレイジングハートを右手に。

俺はバレットM95を肩に担いで。

あと、さんづけやめて。

ミッドチルダ・七月十七日十時ごろ？

「クリエイティブマイン創造自身、礼儀だ、教えてやるよ。」

俺の能力は自身の都合のいいように物事を改変させる。

LEVEL 4（大能力者）のカテゴリに入ると思われるよ」

「ほーほー、これが死亡フラグってやつっスか？」

「そうだ、『冥土の土産だ』とか『私の戦闘力は53万です』とかは確実に死ぬから覚えとけよ」

「はーい」

ガジェットドローン（？型とか言うらしい）を殲滅した後で、高町がてこずっているのでさっさとトンズラしようと走り出すと、目の前に下りてくる盾っぽいなんか。

それに人が乗っていないはずが無く、この前のタイツのお嬢ちゃんによく似た少女がこちらに微笑んでいた。

始まりの言葉は挨拶。

開戦の気配がまったくしなくなり、話もずれてきていた。

「で、なんのようだ？」

この前のお嬢ちゃんと言い、タイツフェチじゃ無いんだがな」

青ピだったら問題なくストライクゾーンだろうがな。

「ドクターにサイレントを『穏便に』連れてこいと言われてるっス。

だから素直についてきてくれないっスか？ 手荒な真似はしたくないんで」

「断る」

「ですよー」

ならなぜ言った。

「知ってるっスよ、これが形式美ってやつっスよね。じゃ、手荒な方法に切り替えるっス」

「おお、わかってるじゃないか。だが、まだまだ尻が青いな」

「青いのはタイツっスよ」

「んなこたあどうでもいい、比喻だよ。」

「——お前らの目的は知らんが、引かねえと…」

「——どうなるんっスか？」

無言の帰宅になるだけさ。

「アタシの武器は『ライディングボード』！　そしてISはこの盾を浮かすことのできる『エリアルレイブ』！
さあ、はじめようっす！」

「上等！」

バレットM95を後ろにバックステップを踏みながら打つ、ボルトアクション式のこの銃は連射が効かず、かなり接近戦だと不利だ。もっともライフルに接近戦が得意なものがあるかどうかの問題もあるだろうが。

「へっへーん、そんな豆鉄砲きかないっすよ！
現代兵器なんて時代遅れっすからね、一般人が使うものを対策してないわけないっす！」

そりゃそうか、そう心の中で頷きつつリロード。
別に殺すつもりもないが、殺されてやるつもりもない。
なにやら防いでいるときに青い波紋のようなものが出ていた、おそらく銃弾を防いでいるものの正体はそれだ。

魔法やは『よくわからん』が、『よくわかる』。
俺は、弾切れになったM95を小娘に投げつける。

「うわ！？　自棄っスか？」

いくら勝てそうもないからって武器を投げるなんて――」

「――『Caades008』（静止する狼の狩り）」

世界は止まった。

本当に止まったわけではない、時間と時間の間の隙間に俺が潜り込んだだけ。

現実時間にして約17秒間の静止した世界（はっきりと計ったわけではないが）で自在に行動できるのは発動者の俺のみ。

故に『Caades』（虐殺）。

この世界の中ならば、俺は。

絶対に負けない。

「――みつともない：っスよ？」

吐血、小娘は頭上にクエスチョンマークを浮かべながらライディングボードとか言った盾の上から転げ落ちた。

「な、なん、で？」

「テメエはお呼びじゃねえってこった」

「――また、クア姉に、怒られ：」

どうやら、意識を手放したようだ。

「『自身創造』、能力は単純だ。

ようは強い自分を創造すればいい。

戦う自分の最強の姿をな」

小娘はほっときや誰かが回収すんだろう。

「あー、高町はー」

うげ、タイトガールズ三人とやりあってる。

しかも押してるし、だから魔力馬鹿は嫌いなんだ。
魔力って言葉を知ったのもつい最近なんだがな。

「ふう、今のうちに逃げるが得策か」

「それは遠慮してもらえるかな？」

首元に金色の刃が立てられる。

この声は、資料の中にあった…。

「フェイト…、なんだっけ？」

「フェイト・T・ハラオウン、管理局所属の執務官です。
おとなしく武装を解除し投降してください」

「おーおー、最近の若もんは怖いねえ、っと！」

魔術を使う。

先ほどの魔術は『静止』、今度のは少し違うシロモノの――

「バイビー」

『進行』だ。

彼女は突き立てていたはずの刃の先から俺が消えて数十メートル先のデパートの入り口付近までいることに驚きを隠せていない。よって。

「俺の勝ちさ、管理局諸君」

裏切られるまえにエルザに準備してもらった、転送の合言葉を紡ぐ。

「『good bye ARCADIA』」

『認証確認、転移準備開始。』

場所、固体識別名称『地球』
あらかじめ設定された場所へアクセス。
システムオールグリーン、転送開始』

「待って！」

「やだよ、じゃーね。
管理局の皆さん、地球に来たら相手してやるよ」

『転送完了』

学園都市・七月十七日昼過ぎ

「空気がうめえ…」

拝啓、パパ上&ママ上。

いかがお過ごしですか？ 知ったこっちゃないですが。

「あ、アンタ！

この前の車キャッチマン！？」

「おお、超電磁砲。
レールガン

昨日ぶりだな」

「アンタ、その状況で挨拶はないわよ…」

ふむ、何か問題があるのか？

「とりあえず、そっからでなさいよ」

「はまって無理」

「ハアッ!？」

地面に下半身が埋まっているだけなのだが。

「うむ、助かった。」

感謝するぞ超電磁砲」

「…こんなに疲れるものだったのね風紀委員ジャツジメントって」

おお、そういえば風紀委員の腕章をつけているな。

「いつから風紀委員になったんだ？」

「ハ？ いや、もともとよ！」

別に黒子にゴチャゴチャ言われて悔しいから見返してやろうと思
って嘘ついたわけじゃないんだから！」

わかりやすッ！？

ものすっごいわかりやすい説明ありがとう！

「ok、頑張ってくれたまえ。」

陰ながら応援させてもらおう」

そういつてクルリと体を翻す。

目的地は一つしかない。

「ま、待ちなさいよ！？」

ひ、左手は大丈夫なの…？」

歩き出したのを止めずに左手でフリフリと振り、答える。

ホッ、と嘆息が聞こえ思わずニヤけたが、すぐに気を引き締める。
これから行くのは敵地なのだから――。

「よかったあ…」

自身の技で被害にあった彼に大事が無く安心する。

「それにしても、学園都市の技術ってやっぱすごいわね…。
骨がグチャグチャになっても復活するなんて」

あの日見た、彼を思い出す。

彼女のために命を張って飛んできた車を止めるなんて、普通じゃ無理だ。

あの人を守るために体を張ったときのあの顔が忘れることができない、これじゃあまるで――。

「――恋する乙女じゃない」

自身の考えをかなぐり捨て、笑う。

それは自らを自嘲するかのように。

「アイツにはものすごい可愛い彼女がいるんだから…」

「いくわよ、御坂さん！」

「あ、はい」

飲み終えたヤシの実サイダーの缶をゴミ箱に捨て、先輩と思しき人についていく。

先ほどまで考えていたことを、吐き捨てながら。

「アタシじゃ無理ね…」

御坂が吐いた、最初で最後の弱音だったのかもしれない。

「あー、やっぱりか」

もう遅かったようだ。

昨日まで在ったはずの教会は、ただのさら地になっていた。

「やれやれ、手掛かりもくそもなしか」

自身を裏切った諸悪の根源はもはや霞の如く存在を隠蔽していた。これ以上の搜索は確実に無駄足になるだろう、相手はもともと隠れて行動するのは一級品な上手さの持ち主なのだから。

「手掛かりなし、バックアップもなし。

さーて、困ったね」

そうごちて、手元にあるチェーンで結ばれたデフォルメがかったキーホルダーを見る。

槍や劍、本の形をしたそれらはかつて依頼で手にしたものである。

「残ったのは武器と『宝具』だけか……」

まあいい、なるようになるさ。
さら地を軽く睨み、反転する。

「会ったら殺すまでだ」

ゆったりと歩き出す。
さて、どこに行こうか。

「児童公園か、懐かしいな」

家へ帰る途中、懐かしいところを通ったので寄ってみる。

[illegible]

「なんだ？」

噴水の近くでゆっくりと周りを眺めていると、緑のバックをくわえた犬と全力疾走する――。

「今日は縁があるようだ」

超電磁砲を見つめた。

「あ！ その犬捕まえて！」

「ほー、何事か知らんが任せろ」

直進してくる犬に向かって髪を数本引き抜き、『創造』。

「ほれ、当たるなよ」

創り出したのは柄の太い槍。

それを犬の前の地面めがけて投擲。

「キャイン！？」

「おー、飛ぶねえ」

驚いた犬はくわえていたバッグをあらうことか噴水のほうへスル
ーした。

「ちょっと、待ちなさいよおおおおお！？」

驚愕の顔で超電磁砲が全力疾走から槍を台にしての大ジャンプ、
台だけに。

結果、体はビチヨビチヨになりつつも、バッグは無傷であった。

「やんややんや」

「うっさい！」

超電磁砲を弄っていると、メガネをかけた風紀委員の腕章をつけた女子高生っぽいやつが現れた。

お、風紀委員二人組みも一緒か。

「お手柄ね御坂さん」

ひょいと、超電磁砲の手元から取っていった。

「あああああああああああああああああああああ!!」

「オンドウルルラギッタンディスカーーー!」

「な、なに!?!」

「そんなに雑に扱っていいんですか!?!
爆弾処理班とか呼ばないと…!」

なにを勘違いしてるんだ、この子は?

「なかからは爆発物の反応は無いぞ」

「…へ?」

「はい、どうぞ」

「ありがとうー」

「? どーゆー…!」

超電磁砲は混乱している!

「御坂さん、あの子のバッグを探してあげてたんですね」

「はい？」

お、茶パツインテールのほうが超電磁砲にタオルを持ってきた。
俺にはないのかよ、結構濡れてるんですけど。

「お誕生日にご両親からプレゼントされたものなんですって」

「はい？」

なによソレー、と悲しい声が響いた。

あの後、風紀委員に茶々入れられるのがめんどくさかったため逃げた。

そして、追われたので全力で逃げた。

以上のことから何が起るかというと――。

「どこだよ、ここ」

盛大な迷子であつた。

学園都市・七月十七日夕刻

「どこだよ、ここ」

迷子です、嗚呼迷子です、迷子です。

俺の心の俳句。

「もっこりもこもこー」

意味もなく訳のわからないギャグをいってみる。

むなしい。

「それもこれも全部人がいないから…、だ？」

——何でこんなに人がいないんだ？

児童公園ではたくさん居たし、時刻も午後五時。
お休みタイムには早すぎるはずだ…。

ま、いっか！

「ここはどこだろうなー」

超楽天家といわれてもかまわないー。

「はあ…、はあ…。」

いいかげんしつこいかも！」

「AMEN」

「AMEN」

「かなり不気味かも、それ！」

シスター服を身に纏った銀髪の少女は、追われていた。

黒マントに逆十字、『彼』が探していた『神聖クロス教会』のもので相違ない。

彼らは誓いの言葉を口に出しながら彼女を執拗に追い回していた。

「AMEN」

「AMEN」

「もういいよ、それ！」

「どれがいいんだい？」

懸命に走る彼女の前に現れる、赤髪で長身の修道服を纏う男。

そのかたわらにはジーンズを左側だけ裂き、太ももを大きく露出

させた痴女。

「もう！ どうして変態ばかりなの！」

彼女は人のいない大通りに閉じ込められた。

「だれか、たすけてかもー！！！」

「よんだか？」

「よんだか？」

颯爽登場！ *****(著作権的にアウト)

「ほえ？ だれ？」

ちょ、おま。

「助けてっつたろうが」

「それで助けに来るなんてアナタ馬鹿かも」

出会って直ぐの女の子に罵倒された。

かなりショック。

「あら、久しぶりね」

漫才をやっていると、裂ける人の山。

教会の信者たちの間から姿を見せたのは…。

「——よう、『一撃必殺』（ヒットマン）」

「あら、その名前で呼ぶのかしら」

「それともこちらのほうがよろしいか？」

——エルザ・エルート・ヴェネツジ

かつての同僚のエルザだった。

「で？ テメエが出張るってことは、このガキに大層な価値があるってことか」

「そうよ、その娘はウチに大きな利益をもたらすの。」

お願いだから引いてくれないかしら？ 貴方の相手をしている暇はないの」

気に入らない口調だな、おい。

そして、後ろが物凄く暑いのと抜刀音が聞こえるのは何故？

「ねえ、インデックスちゃん。」

お兄さんたちは貴女がいるから死ぬのよ？ わかる？」

「…意味がわからないかも」

「そうでしょうね、つまり。」

——こうするのよ!」

彼女から立方体のものが溢れ、背後にいた不良神父に当たった（目で見てないけど）

「ステイル!」

痴女の声も聞こえるし、そのとおりなんだろう。

「——っあ」

「わかったかしら? 貴女がつき従えば見逃す。
断れば、貴女以外はみんな死ぬことになるわ」

「……………」

ステイルっ、と後ろで騒ぐ声が聞こえる。

俺の真隣にいる少女は究極の選択をさせられているのだ。

一人で犠牲になるか、全員を巻き込むか。

その瀬戸際。

——つまり。

「断る」

「へぐうつ!?!」

俺のターン！

「なに俺をハブってんのさ、テメエは提案する前に俺に殺されるべきだろうがストコドッコイ」

「ぐう、いくら貴女でもアタシの能力には勝てないのよッ！
おとなしくしてなさいよ！」

再び馬鹿の手から立方体が放られる、正体は。

「サイコロかよ」

一から六までの数字が書いてある、あれだった。

「チッ、甘く見ていたか。」

しょうがない、アンタ等は『必要悪の教会』（ネセサリウス）の
始末とインデックスの確保！」

「[AMEN!!]」

それしかしゃべれねえのかよ。

「やれやれ、雑談は終わったようだね」

「ええ、そのようです」

『Fortis931』（我が名が「最強」である理由をここに証明する）

『Salvare000』（救われぬ者に救いの手を）

『Caades008』（静止する狼の狩り）

魔法名が聞こえたと同時に走り出していたAMENSが後方へ吹き飛ぶ。

「遠慮は要らないようだね」

「そうですね、どうやら――」

「死なねえみたいだしな」

インデックスとか言うのを逃がしつつ、脇役だった二人と声をそろえる。

『死者操作だッ！』
ネクロマンズ

「エルザア、どういうこった。

教祖様はお亡くなりになったんじゃないのかよ？」

「貴方に本当のことを言うと思ってたの？

なんなの、馬鹿なの、死ぬの？」

三人で別々に別れ、二人組みはAMENS六人組を三人ずつで分けた。

つまるところ、俺は余ったエルザの相手のみ。

「我らが教祖は死なぞ知らぬ、永劫不滅の御身をお持ちなのよッ！」

「そりやすごい」

時速150キロぐらいの速度でサイコロを投げる女、シニールである。

それを受け止める俺も俺だが。

「『一撃必殺』（ヒットマン）、範囲内の者に確実に致命傷を負わせる『原石』。

異能力者といったところか、射程は短いようだな」

「――さすがね、と言いたところだけれど」

やな予感。

「こうすればいいのよッ！」

踏み込んで来た、それは吐息がかかるほどの距離に。

「お・わ・り」

彼女と俺の唇が重なった。

「ぐ、あぎやあああああああああああああああ！？
 いたいいたいいたいいたい！？」

たすけてええええええええええええ！？」

断末魔をあげたのは彼女だった。

「お疲れ様です」

「おお、痴女」

「だれが痴女ですか！ あとステイル笑うな！」

戦闘終了後、現場は酷いものだった。

まず、不良神父の戦闘痕はドロドロした何か。

次に、痴女は何かボロボロな肉片。

唯一死体が残っているのが俺だけとかないわあ。

ゴチャゴチャ言っていたが、不良神父はインデックスとか名乗ってた？ 少女を追っていった。

ロリコンめ。

「では、まず礼を」

「ああ、気にしないでいい。

結果的に手助けみたいに見えるが俺は仕返ししたただけだから」

「仕返し？」

「まあ、触れないでくれ」

「わかりました、それでは次に質問を」

「どうぞー」

「貴方は魔術師ですか？　そうであれば所属はどこでしょう」

「魔術師っちゃあ、そうかもな。
所属も何もないが」

「？　では…」

「おっと、腹の探り合いは遠慮だぜ。
悪いがアンタにゃあ理解できない」

「――そうですか、では失礼します」

踵を返し、歩き出す痴女。

「アンタは迷いすぎだよ、だから何も護れないんだ」

言葉に振り向き、見渡す痴女もとい神裂。

「いない…」

だが、そこには死体しか転がっていなかった。

「――迷ってなどいない、救ってみせます…」

彼女は一人ごちた。

「さて、側近の一人が死んでアンタはどう動く。
観察させてもらおうか、『完全蘇生』（レイズ・ネクロマンス）。
俺の仕返しは終わってないぜ」

彼は胸元のキーホルダーたちを強く握った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3589r/>

消音は語る

2011年10月8日13時21分発行